

波多野茂弥

私がパリのロマン・ロラン研究所に通いはじめてから、早くも一年余りを経過した。この間、ロマン・ロランの思想、作品、伝記的事実等について、以前あまりよく把握していなかったことや、見落していた点や、全く知らなかった事実をかなり多く学ぶことができたし、また今後仕事をすすめる上に必要な展望も或る程度ひらけてはきた。しかし、ロマン・ロランと演劇という当面のテーマに関しては、あまりにも道草を喰いすぎたという気がしないでもない。

時々、「二兎を追う者一兎をも得ず」と反省もしてみるのが、いざ実際勉強にとりかかるとなるとつい資料に引きずられて、脇道にそれてしまいがちである。それは、ここでなすべき総てのことが一応はつきりしているにもかかわらず、心の奥のどこかにひそんでいる、「あれもこれも」という気持が知らず知らずのうちに頭を^{もた}拾ってくるからだと思われる。このようなジレンマは、ひとり私だけでなく、一年またはせいぜい二年の予定で初めてヨーロッパへ留学している人たちの多くが経験したことではなからうか。その点、ヨーロッパの各地からここへ勉強に来る研究者たちは、私の見たかぎり実にはつきりしている。パリ大学へ提出する学位論文を準備

中の幾人かは別として、ふつう一週間から三週間、長くて二・三カ月、自分の現在のテーマに必要な資料だけをきわめて精力的に読みすすめ、終わればさっと引揚げて行く。そして、半年か一年経った頃にまたひょっこり現れる。といった人も少くない。そうした彼らの態度には、われわれの場合との単に地理的・経済的条件の相違だけには帰せられない何ものかが感じられてならない。それをつきつめて行くと社会的文化的な面で遠く離れた日本からいきなり出てきた者の西洋理解の困難さという重大な問題につきあたるのである。ともあれ、私自身としてはあとに残された期間、一日一日を十分に生かすように努力するほかない。

さて、ロマン・ロラン研究所はモンパルナス大通りの八十九番地、——有名なロダンのバルザック像がプラタナスの木立ちを背にして悠然と立っているブルヴァール・ラスパイユとの交叉点から西へ約百五十米、モンパルナス駅前からだ東へ百米ばかり行った北側、リュ・デュ・モンパルナスをはさんでノートルダム・デ・シャンの教会と隣り合った建物の二階にある。

モンパルナスのあたりは、生前のロランにとっても縁浅からぬ土地で、彼が一八九〇年代に、最初の結婚の幸福な数年間をすごしたのは、モンパルナス大通りの裏手にあたるリュ・ド・ノートルダム・デ・シャンの七十六番地であったし、その後『ジャン・クリス

トフ執筆時代のほぼ十年間、彼は同じ大通りの百六十二番地に住み、そこから、当時彼が芸術史の講義を担当していたソルボンヌの教室や、シャルル・ペギーが「カイエ・ド・ラ・キャンゼーヌ」を編集していたソルボンヌ街五番地の家への道を、いつもリュクサンブール公園を通り抜けて通ったのであった。

ロランは一九四四年の暮れに、ブールゴーニユのヴェズレーでフランスの解放を見ずして世を去ったが、彼の著作、遺稿、彼に宛てた多くの人々の手紙、その他彼に関係のある書物や雑誌や新聞等を、戦後間もなく、彼の未亡人マリー・ロラン夫人がパリ大学に寄贈されたの機として、ロマン・ロラン研究所が設立された。そしてそれ以来、これらの遺稿や文献を整理すると同時に、ロランが生前有名無名を問わず世界各国の数多くの人々に与えた手紙をはじめ、多くの国で翻訳され、出版されている彼の著作や、彼について書かれた書物、論文、記事等をできるかぎり収集し整理して、それらすべてが、ロランの遺稿や日記や書簡の出版と、彼および彼に種々の面で関係の深かった思想家や作家や芸術家に関する研究に、いつでも役立つようにすることが、研究所の主要な仕事となっているのである。

この地味で骨の折れる仕事は、幸にも、確固たる信念と強い意志をもち、俊敏な頭脳と旺盛な活動力とをそなえ、かつてはロランの

よき伴侶であり、いまは研究所およびロマン・ロランの友の会の実務の責任を文字どおり一身に背負って奮闘しておられるマリー・ロラン夫人を中心に、彼女を直接間接に扶ける数多くのロランの友たちの協力によって、これまで十数年にわたり、きわめて実的な仕方で行われてきたし、今後ともたゆみなく進められて行くであろう。

現在、研究所には、『ジャン・クリストフ』、『魅せられたる魂』、『コラ・ブルニヨン』等の作品のためのノート、初期の未発表の戯曲のうち現存するもの全部、ロランの『告白録』コンファエシヨンともいうべき『内面の旅路』や『回想録』メモアールの草稿、彼が幾つかの雑誌で担当した演劇および美術時評、彼の日記のうち発表可能な部分、今日までに収集された彼の手紙の殆んど全部、彼に宛てた手紙の一部——大よそこれだけのものがタイプライターによってコピーされ、必要に応じて取り出させるように、番号と見出しとを附した二百冊以上の大型ファイルに分類されている。このうちの幾らかは、すでに大小合わせて二十点近い書物となって世に出たし、今後とも逐次出版されて行くことは云うまでもないが、ここを訪れる機会をえたわれわれ研究者は、当分発表される見込みのないものも含む未刊の膨大な資料を自由に閲覧し、ノートを取り、時には筆写もして、各自の研究に資することを許されているのである。

研究所はやがてパンテオン広場の北側にあるサント・ジュヌヴィエーヴ図書館の、此の春竣工したばかりの新館に移る予定である。そこはモンパルナスの研究所に比してはるかに広く、設備もよいので、この移転が実現すれば、もはや他では容易に手に入れ難い重要な文献で、現在或は他の場所に分置され、或は書庫に眠っているものも一個所にあつめて分類整理されることになり、研究所としての機能が一段と増すことが期待される。(パリ一九六一・七・五)